

統合実習に対する期待や不安と実習後の学び -働く自分がイメージできる実習-

福嶋 玲子[†]第65回国立病院総合医学会
(平成23年10月8日 於 岡山)

IRYO Vol. 67 No. 3 (139-143) 2013

要旨

平成21年度に看護基礎教育のカリキュラム改正が行われ、私たちの学年から統合実習が開始された。学生からは、初めての实習形態であることから戸惑いの声も聞かれた。そこで統合実習前の思いについて事前にアンケートを行い、実習終了後には口頭で学びと成果、感想について聞き取りを行った。

アンケート結果から、統合実習前の思いとして看護師長の管理業務、リーダー看護師の役割、夜間の病棟の様子など今までに体験したことのない実習内容に楽しみ、期待を感じている学生が多かった。さらに、臨床で自分自身が実際に働く姿がイメージできるなど、臨床の様子を体験することで入職後の戸惑いが軽減されるのではないかという回答もあった。一方で、夜間実習、複数受け持ち、点滴静脈内注射については関心だけでなく、「どうしよう。できるだろうか。」という不安も強く初めての体験に対する期待と不安が存在していることが明らかとなった。

統合実習終了後の学びや成果、感想の聞き取りでは、リーダーへの報告・連絡・相談や情報共有の様子を学び、病棟やチーム全体を把握しながら看護を行うことの重要性を学んだ。点滴静脈内注射では、手技の確実さや知識の必要性、身近な日常業務の中に潜む危険についても考える機会となった。

統合実習での経験を通じ、看護業務のイメージがついたことで、入職後の恐怖心は軽減され、心構えができた。また、業務中心に偏ることなく、看護の視点が重要であるという回答が得られた。突発的な指示、想定できない事態や時間的な焦りを経験する中で、優先順位について考える視点が広がり、自己の傾向も把握することができた。また、組織の一員としての役割を知り、一メンバー看護師としての責任について考えることができた。

これらのことから、統合実習は看護師、専門職としての責任、現場へのリアリティを高め、臨床での看護実践へ向けた効果的なスタートラインであったといえる。

キーワード 統合実習、学生、夜間実習国立病院機構岡山医療センター附属岡山看護助産学校 [†]看護学生
(平成24年2月23日受付, 平成24年10月12日受理)

Expectation and Anxiety over Comprehensive Practicum, and Learning of the Training: The Training that Oneself Working can Image

Reiko Fukushima, National Hospital Organization Okayama Medical Center Okayama Nursing and Midwifery School

Key Words: comprehensive practice, student, night exercise

はじめに

国立病院機構岡山医療センター附属岡山看護助産学校では、私たちの学年から各専門領域（成人・老年・小児・母性・精神・在宅看護論）実習後半に統合実習が導入された。統合実習は、看護専門職として基礎的能力を養う臨床への橋渡しの科目として臨床実習の最終的な段階に位置づけられている。基礎看護学実習や専門領域の実習よりも、専門性や技術力・看護展開能力が求められる。統合実習では「複数受け持ち」「夜間実習」「医療安全」「看護管理」「時間的配慮」という実習内容が加わり、学生の間で期待と不安が錯綜していた。そこで、統合実習前の思いについて3年生を対象に事前にアンケートを行った。また、実習終了後は、口頭にて統合実習での学びと成果の調査を行った。

倫理的配慮

対象者へ調査の趣旨、学会発表での公表、守秘義務について説明を行い同意を得た上で無記名のアンケートおよび聞きとりを実施した。

統合実習までの準備

統合実習へ向けた具体的な取り組みとして、各看護学実習途中の夏休み前後にオリエンテーションが行われ、点滴静脈内注射の技術練習・試験が実施された。学科終了試験や講義、国家試験模擬試験、看護研究原稿作成、就職試験、進学試験に向けた取り組み、オープンスクール準備など、さまざまな要請に追われている中での取り組みであったため、学生からは、「研究や就職試験が優先でそれどころではない」「いまいぢピンとこない」「実習の目的はわかるけど正直しんどい」という声が聞かれた。

一方で技術練習、試験を通して「一つ一つの知識・技術の組み合わせが看護だった！」「もっと知識・技術を身につけなければいけない」「臨床の看護師さんはスゴイ」「看護師に近づいた気がする」という声も聞かれはじめ、身体侵襲をとまなう技術を通して、解剖生理、薬理、フィジカルアセスメントなど今まで学んできたことが必要であったことを再認識できる機会となった。

調査方法

統合実習オリエンテーション後に統合実習に向かう学生の現状について、3年生120名を対象にアンケートを行った。内容は、1. 統合実習に対するイメージ（自由記載）2. 統合実習へ向けての興味・関心度、不安度 3. 統合実習へ向けてのつぶやき 4. 具体的な興味、関心、不安（自由記載）5. 統合実習で学びたいこと（自由記載）6. 統合実習に向けてどのような事前の取り組みが必要であると考えているのか（自由記載）の計6項目を質問した。

統合実習へ向けての興味・関心度、不安度について、統合実習での実習内容の特徴である①メンバー実習②リーダー実習③複数受け持ち④夜間実習⑤管理実習⑥点滴静脈内注射の6つの項目を、「とても興味・関心（不安）がある」「やや興味・関心（不安）がある」「どちらともいえない」「あまり興味・関心（不安）がない」「まったく興味・関心（不安）がない」の5段階尺度を用いて調査した。

統合実習へ向けてのつぶやきについて、統合実習の実習内容の特徴①～⑥の6つの項目に対して、4つの象徴的なつぶやきをあげ選択肢とした。つぶやきは「まあ、なんとかなるだろう」という楽観的なもの、「どうしよう、私にできるだろうか」とう悲観的なもの、「大丈夫、大丈夫、わたしならできる！」の自信に溢れているもの、「これって必要なコト？」と疑問を感じるものの4項目に分けて調査した。

さらに、統合実習終了後に学びと成果について口頭で聞き取りを行った。

統合実習前の思い

1. 統合実習に対するイメージは、主に不安・楽しみという意見であった。不安の具体的内容は、複数受け持ちや夜間実習が初めてであること、今までの実習との違いであった。しかし一方で、普段関わりの少ない看護師長、リーダー看護師の動きを学ぶことができることや夜間の病棟、看護を学ぶことができるなど今までにない経験に対して楽しみを感じている回答も多く、初めての取り組みで不安がある反面、今までにない実習ということで楽しみ、期待を感じていた。さらに、看護師として自分自身が働く姿が想像しやすいなどのイメージがつく、臨床を体験することで、働き初めてからの戸惑いや驚きが軽減されるのではないかとという回答も得られた。

2. 統合実習へ向けての興味・関心度、不安度は、①メンバー実習②リーダー実習③複数受け持ち④夜間実習⑤管理実習⑥点滴静脈内注射の6つの視点のうち、とくに、夜間実習・複数受け持ち・点滴静脈内注射の3項目の興味・関心度が高く、不安も強いという結果であった。

3. 統合実習へ向けてのつぶやきについては、メンバー実習、管理実習、リーダー実習については、「まあ、なんとかなるだろう」という楽観的なつぶやきが圧倒的に多く、夜間実習、複数受け持ち、点滴静脈内注射については、「どうしよう、できるだろうか」という悲観的なものが大多数を占めていた。

4. 統合実習で学びたいことの自由記載では、「申し送り、報告-連絡-相談などチーム医療の実際を学びたい」「複数受け持ちを通して、時間配分の方法や優先度の決定について知りたい」「自分自身が働きだしてからの具体的な勤務のイメージを描けるようにしたい」というさまざまな意見が得られた。

統合実習終了後の学びと成果・感想

①メンバー実習②リーダー実習では、「今まで一人の患者を受け持っていた時には見えなかった看護師の動きがわかった」「すべて患者の安全を守るためにチームで協力している」「自分の受け持ち患者だけでなく、他の看護師の受け持ち患者の部屋も回り二重で患者の様子を把握していたことを初めて知った」「看護師間での想像以上のコミュニケーションが行われ、チームで患者さんを看護していることを実感した」という声が聞かれた。

③複数受け持ちでは、「患者をしっかりと区別してみていかなければならない。名前をいい間違えて報告することもインシデントに繋がってしてしまうことを学んだ。」「複数の患者を受け持っているからこそ、優先順位の判断は必要であることが感じられた」「次回の実習は一人の患者の受け持ちになるが、チームや病棟全体を感じ、把握しながら実習を行いたい」という声が聞かれた。

④夜間実習では、「自分の何気ない動作が騒音を作ってしまったことがわかった」「消灯後、急変がおこらないようしっかりと観察してから消灯しなければならない」「夜勤での役割分担や睡眠の援助について学ぶことができた」「ケアルームの掃除、物品の確認などが行われており、患者に直接関わることだけが看護ではないことを学んだ」

⑤管理実習では、「貴重な体験だった。今まで遠い存在であった看護師長の存在が身近に感じられた」「緊急時のことも常に想定しながら、他科の病床や患者の様子も把握し、経営も考えて病床管理が行われている」「看護師長の姿から、部下を信頼している様子を感じられ、メンバーとしての役割を果たしていかなければならないという責任感を感じた」という回答があった。

⑥点滴静脈内注射では、「とても緊張した。練習中にはスムーズにできたこともできなかった」「この業務を複数の患者を受け持ちながら行っていくのかと思うと不安を感じた」「一つ一つ自分自身の手技の確実さや薬剤に対する知識が問われていることを感じ、責任を感じた」「看護師に近づいているという認識が強まった」という声が聞かれた。

これらの実習での経験を踏まえ、入職後のリアリティについて、以下のような回答が得られた。

「看護師業務のイメージがついた。働き始めた時の最初の恐怖心は軽減されたと感じている」「実際に働く前に看護業務を体験する機会があり、働く前の心構えができた」「看護師長、リーダー、メンバーの役割を知ることで、遠かった看護師業務が身近になった」「業務的な視点だけでなく、患者の看護をするために動くことが重要。業務中心で忙しいと思っていたが、看護の視点を忘れてはいけないことを強く実感した」「今までの学校での授業や行事、実習のすべてが臨床の看護に繋がっていたことを統合実習で感じる事ができた」。

おわりに

今回、統合実習を経験し就職前に臨床現場に近い看護を経験することで、限られた時間の中で、時間を有効に使い看護を提供していくためには、患者との関わりの中で科学的根拠に基づいた知識・技術だけでなく、精神面にも配慮できるコミュニケーション力、気配りが重要であり、その力を育てていかなければならないことを実感した。

また、一人で看護するのではなく、チームで看護しているというメンバー間の横の繋がり、リーダーや看護師長への報告-連絡-相談など縦の繋がりを知り、チーム医療を実体験することができた。

さらに、突発的な指示、患者の状態の急変など、想定できなかった事態や時間的焦りを経験する中で、そのような場面に直面した際の自己の傾向も把握す

【実習前】

【不安】

- ・イメージがつきにくい
- ・夜間実習が初めてで不安
- ・優先順位の付け方、複数受け持ちが不安
- ・今期から初めての統合実習
- ・記録物も異なるため不安
- ・学ぶことが多すぎて不安

【楽しみ】

- ・夜間実習など今までにない経験ができる
- ・普段の実習ではみられない看護師長、リーダー
- ・看護師の動きをみられるとよい学びが得られそう
- ・他の実習とは違う視点で学べる
- ・夜の患者様の様子、看護を学べるのが楽しみ

【その他】

- ・実際に就職した際の戸惑いや驚きが少しは軽減されるのではないか
- ・自分の働く姿が想像しやすく看護師になる実感が湧く
- ・夜勤は看護師になってから経験するものだと思っていたので、学生の間にできるのは将来の自分を想定できる
- ・実践に向けた準備であることが感じられる

【実習後】

【メンバー・リーダー実習】

- ・今までの実習ではみえなかつた看護師の動きがわかつた
- ・すべて患者の安全を守るためにチームで協力していることがわかつた
- ・自分の受け持ち患者様だけでなく他の患者様の部屋も回り、二重で確認していたことを初めて知つた

【管理実習】

- ・とりあえず貴重すぎる
- ・ラウンドの意味を知って驚いた
- ・緊急時のことを常に想定し、経営も考えて病床管理が行われている
- ・部下を信頼している様子が感じられ、メンバーとして役割を果たしていけないといけないという責任感を感じた

【複数受け持ち】

- ・名前をいい間違えて報告することもインジデントに繋がっていくことを学んだ
- ・色々な性格や病態の患者様にに対し、関わり方も切り替えないといけないため大変だった
- ・次の実習でも、一人の患者様の受け持ちではあるが、全体を感じ把握しながら実習を行っていた

【夜間実習】

- ・消灯して暗くなることの恐怖を知つた
- ・真っ暗な中で、急変がおこらないよう、しっかりと観察してから消灯しなければならぬ
- ・自分の何気ない動作が騒音を作っていることがわかつた
- ・夜勤も役割分担がある
- ・物品の確認など、患者様に直接関わる
- ・ただだけが看護ではないことを学んだ

【点滴静脈内注射】

- ・緊張して手が震えた
- ・クレンムを閉じずに点滴ボトルに輸液チューブを刺そうとしてしまった
- ・この業務を複数の患者様を受け持ちながら行つてくのかと思うと不安がある
- ・薬、一つ一つの自分の手技の確実さが問われていること、責任を感じた
- ・看護師に近づいているという認識が強まった



・「看護師業務のイメージがついた。一度色々な看護の側面をみることで、働きはじめたときの最初の恐怖心は少なくなりそう。覚悟はついた」

・「実際に働く前に、このような看護業務を体験する機会があつてよかつた」「働く前の心構えができた」

・「リーダー、メンバー、師長の役割を知ること、違かつた看護が近づいた。これからの実習でも生かすことができそう」

・「業務的な視点だけでなく、患者さんの看護をするために働くこと、業務中心で忙しいと思つていたが、看護の視点を忘れずにいなければならぬということがよくわかつた」

・「今まで学校の授業や、行事、実習で行つている全てが臨床での看護に繋がつていたことを、統合実習を通して感じることができた」

ることができ、これらの経験は、今までの実習では得られなかった想定外の事態への対処や優先順位について考える視点を持つ機会となった。

その後の実習では、統合実習で学んだ視点を持ち、学生各々がチームの一員・組織の一員としての責任や時間の使い方についても視野に入れながら実習へ臨むことができた。

これらのことから、看護学生の集大成として、統合実習は看護師業務や組織の一員であること、自己の傾向を把握することができ、看護師、専門職者と

しての認識、責任感、現場へのリアリティを高め、臨床へ向けた効果的なスタートラインであったといえる。

〈本論文は第65回国立病院総合医学会シンポジウム「臨床と学校で統合実習にどう取り組むか」において「統合実習に向けた取り組みの現状と実習に対する期待や不安 -看護学生の立場から-」として発表した内容に加筆したものである。〉